

## 2022年度海外研修等参加報告書

### MASCC/ISOO annual meetingへの参加報告書

虎の門病院

那須いずみ

Izumi Nasu

この度、日本医療薬学会の海外研修助成をいただきまして、2022年6月23～25日（オンデマンド配信は8月26日まで）に開催されたMASCC/ISOO annual meeting（以下、本学会）に参加し、研究発表を致しましたのでご報告致します。

#### MASCC/ISOO annual meetingについて

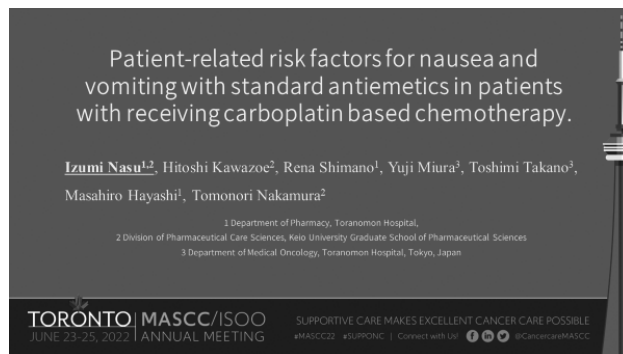
Multinational Association of Supportive Care in Cancer (MASCC) は毎年 International Society of Oral Oncology (ISOO) と一緒に国際的なカンファレンスを開催している。様々な職種ががんとがん治療における支持療法について発表し、知見を深め、様々な国のがんに関連する職種やサバイバーが交流する場となっているようだ。賞や奨学金なども準備されている。COVID-19 パンデミックにより、2020年は中止、2021年はオンラインのみの開催であったが、今年はカナダのトロント現地開催とオンラインのハイブリッドで行われた。今回、私がMASCCへの発表にチャレンジしようと考えたときは2021年年末の感染者数が少なくなってきたタイミングであったため、現地参加も視野に入れて応募した。しかし、日本の状況や勤務先の状況は好転を維持することはなく、オンライン参加となった。

#### Antiemetics -What's New- sessionについて

本学会では様々なテーマのセッションとポスター発表（E-poster）が発表の場となっていた。いずれのセッションも1時間半程度の枠に2題程度の講演的な内容と、3～4題程度の研究発表（oral proffered papers）がされているようであった。私はoral proffered papersの発表となり、日本時間6月24日の朝4時半からのAntiemetics -What's Newというセッションで発表となった。幸い、事前録画したものを送り、それが流れたため、セッションにリアルタイムで参加はしていたが、発表に慌てることはなかった。私の発表タイトルは「Patient-related risk factors for nausea and vomiting with standard antiemetics in patients with receiving carboplatin based chemotherapy. (Nasu I *et al.*, *Clin Ther*, 2020, **42** (10), 1975-1982.)」であり、カルボプラチンを初回使用した患者の悪心・嘔吐の発現の患者関連危険因子を単施設で後ろ向きに調査した結果を発表した。先行研究と同様に、年齢が若年であることは患者関連危険因子となることがわかった。また、デキサメタゾン投与量が少ないことも患者関連危険因子となることがわかった。研究限界も多いが、化学療法誘発性悪心・嘔吐



オンライン学会のスタート画像



報告者の発表スライド表紙

(CINV)の制御はまだ課題があり、重要であると感じた研究であった。

また、このセッションでは東欧の制吐剤の使用について講演があったが、シスプラチンなどの悪心・嘔吐のハイリスク薬を使用するにも関わらず、NK-1受容体拮抗薬を使用できない国があることを知り、驚いた。「Financial Toxicity」という言葉で表現されていることが印象的であった。もちろん、日本では使用できないNK-1受容体拮抗薬もあるが、日本では保険償還される薬剤（アプレピタント、ホスアプレピタント）があり、MASCCやASCOと本邦のガイドラインが推奨する制吐剤が、当然のようにレジメンに組み込まれて使用できることが世界標準ではないことを知ることができた。

他のoral proffered paper発表では同じ日本からカルボプラチンの悪心・嘔吐に対してオランザピン5mgを含めた4剤併用療法について、また、オーストラリアから悪心・嘔吐の予防にショウガの効果を検討した研究が発表され、いずれも実臨床で実現可能性が高い研究であると感じた。

### その他の発表・セッションについて

興味のあるセッションをいくつかオンデマンドで視聴した。免疫チェックポイント阻害薬の効果や副作用と腸内細菌叢の関連性が注目されているが、自己糞便移植により造血幹細胞移植における腸管粘膜炎症の副作用をコントロールするパイロット試験は興味深かった。また、高齢がん患者にお

ける睡眠や概日リズムの乱れのセッションでは、なぜ概日リズムが乱れるのか？～ヨガなどの非薬物療法の有効性も紹介されており、支持療法に特化した学会ならではの感じるとともに、大変勉強になった。

### 最後に

オンライン参加となり、ワークショップの参加や他の国の医療従事者との交流などが叶わなかったことが残念だった。リアルタイムで日本から海外の学会にオンライン参加すると時差が問題となった。また、会場内の動画も流れているが、会場で質問している人の表情などは見られないことが残念だった。一方で、国際学会における言葉の壁については、オンデマンド配信で引用されている文献を調べながら何度も配信を見ることができて、興味のある分野について、普段の学会より深く理解できたと感じた。今後、in personで参加できる機会を得られたときのために、今回のオンライン参加はワンステップになったと考える。

### 謝辞

本学会参加にあたり、ご協力いただいた虎の門病院薬剤部のみなさまと共同研究者のみなさまに感謝致します。

参加費用を助成いただいた日本医療薬学会に深く感謝するとともに、日本医療薬学会の今後のさらなる発展を祈念致します。